

夫が六十歳で逝って、それまで大切にしていた物事や、夢や願いがすべて意味を失ってしまい、季節の推移も他人事のようにしか思えない日々が長く続いた……

桜は美しいだけではなく、私たちの心の中の喜びやかなしみを秘めながら咲き継いできた。

この句の「いくたび」は年月の長さでもあり、多くの出会いの場所ということであろう。その度に感動したのである。「色新し」が感動の核心だが、白眉の発見といえる。桜らしい喜びであり明るさである。

肺腑をえぐられるような稀有の悲しみを経験した作者にして初めて会得された措辞であろう。

「も」に万感の思いが込められている。

講評は、河内静魚先生の句誌「穂」の「秀句鑑賞」より引用。

河内先生は、「馬酔木」「寒雷」を経て、俳句結社「穂」創刊主宰。

月刊「俳句界」前編集長

色新し 桜いくたび出逢ひても

入江 杏



挿絵は山口高専生殺害事件ご遺族の中谷加代子さん

